



# どんぐり

**No.88**

## 内 容

- 巻頭言「環境省認定自然共生サイト『たんよう南但馬自然学校』」
- 自然学校の実施にあたって ～出前事業と下見で、有意義な自然学校を～
- 研究紀要 第18号より
- 県立南但馬自然学校に中学生がやってきた！  
地域に学ぶ「トライやる・ウィーク」
- 歳時記「声は哀愁を帯びて」



「カートンドッグづくり」(令和8年度 加西市立泉小学校)

**たんよう**  
**南但馬自然学校**

TANYO MINAMI TAJIMA SHIZEN GAKKO

*Nature Education Center*

## 環境省認定自然共生サイト 「たんよう南但馬自然学校」

兵庫県立南但馬自然学校長

宮本 貴志



令和8年3月下旬、本校への赴任を前に、本校が立地する朝来山に登りました。山陰随一の桜の名所として「但馬吉野」とも称される立雲峡側から、咲き始めたばかりの桜が彩る山道を登りながら、円山川を挟んだ対岸の小高い山頂にある竹田城跡を眺めました。竹田城は、令和8年のNHK大河ドラマの主人公である羽柴秀長が一時期城代を務めた城としても知られています。

標高756.5メートルの山頂へ続く道沿いには、池や滝のほか、巨石や奇岩が点在しています。樹齢300年ともいわれる老桜に加え、地元小学校の児童が植樹してきた若々しい桜も見られます。山頂からは、竹田城下町や円山川の優美な流れをはじめ、氷ノ山や段ヶ峰の秀峰を望むことができます。

南但馬自然学校は、豊かな歴史が息づくこの竹田城下町に近い自然美に富んだ朝来山の北側斜面の広大な土地に位置しています。敷地全体が朝来群山県立自然公園に含まれており、敷地内にある小さなため池「雨乃宮（あめのみや）の池」を中心に形成されている、モリアオガエルに代表される生態系は、朝来市の天然記念物に指定されています。また、敷地内には絶滅危惧種に指定されている希少な動植物も数多く生息・生育しています。

平成6年4月1日の開校以来、本校を利用された延べ人数（令和7年度末現在）は、自然学校利用が802,117人、自然学校以外の利用が465,494人となり、これまでに延べ130万人近くの方々が本校のこれらの豊かな自然に触れてこられたことになります。

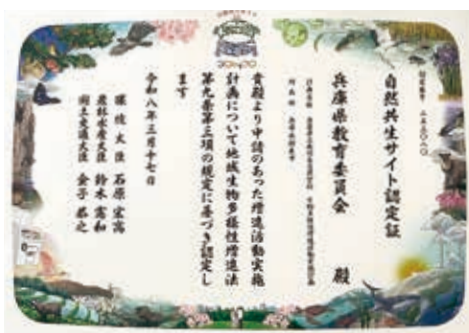
さらに令和8年3月には、貴重な自然環境の保全に努めるとともに、多くの人々に五感を使って自然に親しむ体験活動などのプログラムを提供してきたことが評価され、南但馬自然学校は地域生物多様性増進法に基づく「自然共生サイト」の認定を環境省から受けました。生物多様性の保全が図られている区域として認定されたことを大変喜ばしく思うとともに、今後も子どもたちをはじめ多くの人々が貴重な自然に触れ、生きた学びを深めることのできる場として、その役割を果たしてまいりたいと職員一同決意を新たにしています。

また、本校は今年度より、愛称として「たんよう南但馬自然学校」を使用することとなりました。これは、地元発祥の企業である但陽信用金庫（本店：加古川市）が、ゆかりの地への貢献を模索される中で、兵庫県が進めるネーミングライツ事業にスポンサーとして参画され、兵庫県教育委員会と契約を締結されたことによるものです。

契約期間は今年度から5年間で、同金庫にはネーミングライツスポンサーとして本校を支援してい

ただくことになります。これに伴い、県道277号線から本校へ続く道路入口付近の看板モニュメントや、敷地入口の校名プレートをはじめ、敷地内の各種標識に愛称を掲示しています。また、本校が発行する刊行物や各種催事のチラシなどにも愛称を使用してまいります。

今後は、この愛称が多くの人々に親しまれ、愛着を持っていただけるものとなるよう、本校の諸活動に尽力してまいります。



「自然共生サイト」認定証



県道277号線沿いに立つ本校の看板

# 自然学校の実施にあたって

## ～出前事業と下見で有意義な自然学校を～



自然学校では、様々な活動を行いながら自然体験や共同生活をします。

活動の例として、丸太と木をロープでつなぎ、様々な遊具を作る「隠れ家づくり」。専用の器具で摩擦熱を利用して着火させる「火おこし」。自然いっぱいの施設内で一夜を過ごす「テント泊」。他にもたくさんありますが、どれも魅力いっぱいの活動です。



本校の事業の一つとして「出前事業」があります。本校に入校されたとき、スムーズに活動ができるように、本校の職員が利用校に訪問し、各活動方法をレクチャーします。特に多いのは、「隠れ家づくり」の際に必要な技術である「ロープワーク」です。これを経験しておくことによって、当日、とてもスムーズに活動が開始できます。児童は活動が始まると手探りで進めていきますが、要領が分かり、ロープの結索に慣れてくると、「あれも作りたい!」「これも作りたい!」と意欲もイメージもどんどん湧いてきます。



そして、あっという間に時間が過ぎて行きます。少しでも活動時間を長く確保し、様々なアイデアが詰まったすばらしい隠れ家を作り、たくさん遊べるように、ロープワークの出前事業を勧めています。

出前事業や細かい打ち合わせがあり、プログラムを混乱なく進めることができた。

(実施報告書より抜粋)



児童が家庭を離れ、自然学校で共同生活することは、楽しみでもあり不安でもあります。また、教員にとっても無事に生活させることができるか悩みが多いです。悩みを少しでも解消するために、教員があらかじめ施設のことを把握しておくことはとても重要です。

そこで、本校では「下見」という取組を行っています。教員が計画を立てる前に本校に来ていただき、本校の職員が生活棟、食堂、浴室棟、野外キッチン等の説明をします。あわせて、利用校のねらいにせまるプログラムになるようアドバイスも行っています。特に初めて本校を利用する学校



には、なるべく下見に来ていただくよう勧めています。実際に施設を見ることで、施設の敷地の広さや使い方の把握だけでなく、安全面や衛生面等の注意事項、児童の動きや指導補助員との連携を考慮したプログラムにもなっていきます。ぜひ下見に来てください。

※出前事業と下見のご予約は混み合いますので、計画的に早めにご連絡ください。

### 令和7年度実施状況

出前事業・・・63校

下見・・・51校

(利用全92校中)

## 「研究紀要 第18号より」

本校では、自然学校の課題や実施上の問題点について調査し、自然学校の在り方について研究を進めています。実施した調査・研究は2年ごとに研究紀要としてまとめ、研修講座や自然学校の事前指導等を通してその普及に努めています。また、県内の全公立小学校及び関係機関に提供し、研究成果を報告しています。

令和7年度に刊行した研究紀要第18号では、「Ⅰ 長期宿泊を伴う体験活動を通して児童の意識を探る」「Ⅱ 引率教員の自然学校への取組とふり返りに関する調査から、今後の自然学校を考える」の2本のテーマによる研究成果を報告しました。今回はその一部をご紹介します。

### Ⅰ 長期宿泊を伴う体験活動を通して児童の意識を探る

#### 1 研究の目的

令和7年度に本校で自然学校を実施した児童を対象に、「ふり返り（アンケート）」（92校、4,046人）を行い、児童の視点からの自然学校像を探りました。その結果から、自然学校推進事業の意義と魅力を再検証することを目的に研究を進めました。

#### 2 主な質問項目と結果

児童が自尊感情や自己肯定感を高めるには、自分自身の成長を実感することが重要です。そこで、児童が自然学校を通して「成長した」と実感しているのか、またそれはいつ実感したのかを質問しました。

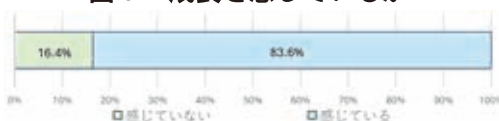
##### (1) 自然学校を通して、あなた自身が成長したと感じていますか。

表1及び図1のとおり、83.6%の児童が自然学校を通して成長を感じたと回答しました。自然学校は、児童にとって成長を実感できる体験活動であったことが、この結果から分かりました。

表1 成長を感じているか

| 感じていない | 感じている |
|--------|-------|
| 665    | 3,381 |

図1 成長を感じているか



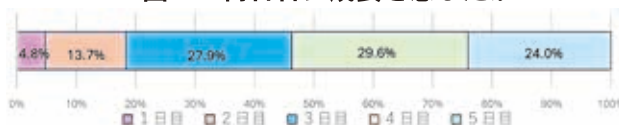
##### (2) 何日目に一番成長したと感じましたか。

表2及び図2のとおり、3日目27.9%、4日目29.6%、5日目24.0%と、4泊5日の後半3日間に児童は成長を実感していることが分かりました。また、4日目と5日目を合わせると53.6%となることから、2泊3日より4泊5日で成長を感じる可能性が高いことが分かりました。

表2 何日目に成長を感じたか

| 1日目 | 2日目 | 3日目 | 4日目   | 5日目 |
|-----|-----|-----|-------|-----|
| 161 | 462 | 943 | 1,002 | 813 |

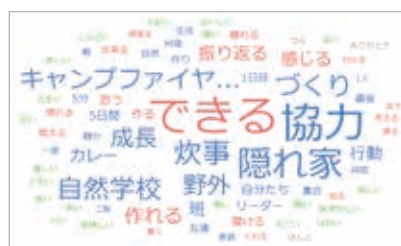
図2 何日目に成長を感じたか



##### (3) その日に成長を感じた理由を教えてください。

児童の自由記述からキーワードを抽出し、テキストマイニングしたものが図3です。ここでは、出現頻度の高いワードが大きく表示されます。「できる」や「協力」という言葉が頻出していることから、友だちとの協力や達成感により自身の成長を感じ取った児童が多かったことが窺えます。また、「炊事」「隠れ家」、「キャンプファイヤー」というワードからは、児童が成長を実感したアクティビティを読み取ることができます。

図3 成長を感じた理由（自由記述）



#### 3 まとめ

以上のように8割以上の児童が成長を感じていることから、自然学校は児童の成長を確実に実感できる活動になっていると考えられます。また、その成長したという実感は、2泊3日ではなく4泊5日でなければ得られなかったとも推察されます。児童は、日程の後半になるに従って、確実に自身の成長ぶりを感じ取ることができているようです。

## Ⅱ 引率教員の自然学校への取組とふり返りに関する調査から、今後の自然学校を考える

### 1 研究の目的

令和7年度に本校で自然学校を実施した5年生担任を対象に、「令和7年度自然学校推進事業の充実に向けたアンケート」(167人)を行い、教員の視点からの自然学校像を探りました。その結果から、自然学校を通じた児童の成長や変容、教員自身の成長、そしてそれらを学校教育に生かすための工夫等について明らかにすることを目的に研究を進めました。

### 2 主な質問項目と結果

本校の自然学校におけるねらいの達成や児童の成長をふり返り、教員自身が最も適当と考える自然学校の実施期間について質問しました。

#### (1) ねらいの達成、児童の成長の観点から、適当だと考える実施期間について

表3のとおり、従来どおりの「4泊5日」が適当とした回答が最も多かった一方、「2泊3日」と回答した教員も同程度見られました。

表3 適当だと考える実施期間（人）

| 実施期間             | 回答数 | 回答者比率 |
|------------------|-----|-------|
| ア 日帰り（日帰り複数回を含む） | 1   | 0.6%  |
| イ 1泊2日           | 5   | 3.0%  |
| ウ 2泊3日           | 67  | 40.1% |
| エ 3泊4日           | 19  | 11.4% |
| オ 4泊5日           | 72  | 43.1% |
| カ 5泊6日           | 3   | 1.8%  |
| キ 6泊7日以上         | 0   | 0.0%  |

#### (2) 実施期間と年代別のクロス集計

教員が適当と考える実施期間と年代別をクロス集計したところ、表4の結果を得ました。「2泊3日」と「4泊5日」を比較すると、20代では「2泊3日」が7.3ポイント、30代では「4泊5日」が11.4ポイント上回りました。また、40代以上では「2泊3日」と「4泊5日」とも同数となる結果になりました。

表4 年代別のクロス集計

| 実施期間             | 年代 | 20代 |       | 30代 |       | 40代以上 |       |
|------------------|----|-----|-------|-----|-------|-------|-------|
|                  |    | 回答数 | 回答者比率 | 回答数 | 回答者比率 | 回答数   | 回答者比率 |
| ア 日帰り（日帰り複数回を含む） |    | 0   | 0.0%  | 0   | 0.0%  | 1     | 1.8%  |
| イ 1泊2日           |    | 1   | 2.4%  | 2   | 2.9%  | 2     | 3.6%  |
| ウ 2泊3日           |    | 19  | 46.3% | 25  | 35.7% | 23    | 41.1% |
| エ 3泊4日           |    | 4   | 9.8%  | 9   | 12.9% | 6     | 10.7% |
| オ 4泊5日           |    | 16  | 39.0% | 33  | 47.1% | 23    | 41.1% |
| カ 5泊6日           |    | 1   | 2.4%  | 1   | 1.4%  | 1     | 1.8%  |
| キ 6泊7日以上         |    | 0   | 0.0%  | 0   | 0.0%  | 0     | 0.0%  |

### 3 まとめ

以上のように「2泊3日」と「4泊5日」では、やや「4泊5日」を支持した先生方が多い結果となりました。また年代別に見ると、20代は「2泊3日」、30代は「4泊5日」が上回りました。先生方の自由記述からそれぞれを支持した理由をまとめると、「4泊5日」では、①活動の充実（多様なアクティビティをゆとりをもって実施できる）、②人間関係の深化（児童間の関係を構築する機会と時間が確保できる）、③協調性の育成（長期の集団生活により相手を意識した経験ができる）、④自立心・忍耐力の育成（長期間家族と離れた生活をするによる自立が期待できる）等があげられました。一方、「2泊3日」を支持した理由としては、①教員の負担軽減（心身とも余裕を持った指導ができる）、②児童の心理的負担軽減（心身や体調を崩すリスクが小さい）、③内容の工夫で成長可能（2泊3日でもプログラム次第で成長は促せる）、④担任の一貫した指導が可能（全日程を担当が担当できる）等があげられました。本テーマについては、今後も多角的な視点を踏まえながら研究を継続していきます。

※紀要の詳細は本校HPで見ることができます。右の二次元コードよりアクセス可能です。是非ご一読ください。(主任指導主事兼指導課長 西口 元浩)



## 県立南但馬自然学校に中学生がやってきた！ 地域に学ぶ「トライやる・ウィーク」

令和8年6月1日（月）から5日（金）までの5日間、「地域に学ぶ『トライやる・ウィーク』」（以下、「トライやる・ウィーク」）において、朝来市立和田山中学校2年生4名を受け入れました。本校での受入れは、平成29年以来、9年ぶりです。

「トライやる・ウィーク」は、中学2年生を対象に、地域や自然の中で主体的な体験活動を行い、豊かな感性や創造性を育むとともに、自らの生き方を考える力の育成を目的とした事業です。兵庫型「体験教育」に位置付けられており、本校で実施している小学5年生対象の「自然学校推進事業」と並び、重要な役割を担っています。

本年度は、自然学校の業務や活動の体験を通して、社会の一員としての自覚を育てるとともに、自立心・協調性・勤労観の醸成を図りました。また、利用校の児童や本校職員との関わりを通じて、コミュニケーション能力を高め、より良い人間関係を築く力の育成を目指しました。

本稿では、「トライやる・ウィーク」での生徒の活動の様子を紹介します。

### 中学生にも人気No.1アクティビティ

#### 「隠れ家づくり」の補助



安全に丸太を運ぶためには、どうすればよいのかを実演しました。



活動に向けての準備や活動後の片付けも率先して動きました。



児童のヘルメットのあごひもの長さの調整やかぶり方についてアドバイスをしました。



中学生も「隠れ家づくり」を体験し、夢中になってつくりました。

## 施設散策・安全点検



施設内を散策し、児童が安全に活動できるよう、各所の点検を行いました。

## シーツ点検



敷布団用と掛け布団用のシーツが正しく袋に入っているか点検を行いました。

## 木ホルダーづくり



木ホルダーづくりの活動方法について学ぶために試作品を作りました。



入校・退校式への参加や火おこし体験、火おこし器の整備など、利用校の児童や本校職員と関わりながら、多くの活動に参加しました。修了式では、「学んだこと」や「これからの生活に生かしたいこと」などを、堂々と発表してくれました。修了式後には、自分たちで火をおこし、「棒焼きパンづくり」に取り組みました。

## 「トライやる・ウィーク」を終えて…これからどのように過ごしていきたいか



- 大人の社会では時間を守ることが大切なので、時計を見て余裕をもって行動していきたいです。
- 南但馬自然学校で学んだ「人とのコミュニケーションを大切にすること」を、これからも意識していきたいです。
- 周りをよく見て、自分とのバランスをとりながら過ごしていきたいです。
- 自分たちがいろいろなことを利用できているのは、見えないところで働いてくださっている方々のおかげだということに感謝の気持ちをもって過ごしたいです。

〈生徒のふり返りより抜粋〉

5日間という短い期間でしたが、県立南但馬自然学校の職員として意欲的に活動に取り組み、自分たちに何ができるのかを真剣に考える姿は、頼もしく感じられました。

最終日の帰り際、「楽しかった。来週も来たい。」と笑顔で語る生徒の姿から、この5日間で育まれた仲間と協力する力や働くことへの意識の高まり、さらに働くことへの自信の芽生えが感じられました。また、そこに至る過程においても、多くの学びがあったものと考えられます。

今後も、子どもたちがさまざまな経験を通して成長を実感し、その学びを次へとつなげていける場であり続ける必要性を、改めて強く認識しました。

(尾花 和哉)

## 声は哀愁を帯びて



全身を赤でコーディネートした夏の渡り鳥  
体の色こそ異なるが、カワセミの仲間

くちばしと小さな脚は特に赤く、「火の鳥」の異名を取るのもうなずけます。ところが、全身に赤色をまとった火の鳥も、腰には水色のラインがチラッと覗いています。この「ブルーのパンツ」とも称されるワンポイントコーディネートは、まさにセンスの塊！



腰のブルーのラインはアクセント  
パートナーに翼を広げてアピールする

事に来てくれたんだな」と、見たい気持ちを棚上げしてほのぼのとした気分させられるのは、あの哀愁を帯びた声のなせる業なのでしょう。



大きなくちばしで、カエル、トカゲ、魚など  
多様な生き物を捕らえる

6月に入り、本校のキャンプ場では「キョロロロロ～」と尻下がりに消えていく、どこかもの悲しい声が聞こえてくるようになりました。この声はアカショウビンという、南の国からやって来る渡り鳥のもので、高く澄んだ声は思いの外、遠くまで届きます。

左の写真をご覧ください。名前に「アカ」が付くのは伊達ではありません。ほぼ全身が赤褐色に近い赤みを帯びた色で、中でも大きな

これだけ鮮やかな色合いでも、姿を探すのはなかなか大変です。本来、薄暗い広葉樹林を好むため見つけにくいのは当然ですが、森に日が差ししても、葉っぱを透過する光にうまく溶け込んでしまうのがアカショウビンの体色です。

「声はすれども姿は見えず」の状況に、これまで何度もヤキモキさせられました。しかし、声を聞くだけで「まあいいか、今年も無

事に来てくれたんだな」と、見たい気持ちを棚上げしてほのぼのとした気分させられるのは、あの哀愁を帯びた声のなせる業なのでしょう。

梅雨の時季によく鳴くところから「雨乞（あまご）い鳥」とも呼ばれるアカショウビン。今頃、豊かな森の奥ではヒナたちが巣立ちを迎え、親鳥たちの子育ても一段落している頃でしょう。

やがて秋の気配が近づくと、今年生まれの若鳥たちも本校の森を後にし、遙か南の越冬地に向けて旅立っていきます。去りゆく夏の主役に「達者でな！また来年！」とエールを送ります。



※森の奥から「キョロロロロ～」と響くアカショウビンの声を二次元コードからお聞きください。

(増田 克也)